



Title	高齢化に先手で備える : WH0西太平洋地域で進める健康な高齢化
Author(s)	神田, 美希子
Citation	目で見えるWH0. 2026, 96, p. 24-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105791
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高齢化に先手で備える：WHO西太平洋地域で進める健康な高齢化



WHO西太平洋地域事務所 データ・戦略・イノベーション部門
高齢化プログラム テクニカルリード

神田 美希子 (かんだ みきこ)

看護師（日/米）、保健師。千葉大学を卒業後、臨床、日本看護協会を経て、東京大学大学院国際保健政策学へ進学（修士・博士）。2016年からWHO、UNAIDSに勤務。

現在の職務について

高齢化は静かに、しかし確実に社会の「当たり前」を変えていきます。私はマニラにあるWHO西太平洋地域事務所では高齢化プログラムを担当し、加盟国とともに、高齢化に対応する政策と現場づくりを支援しています。西太平洋地域では2020年に高齢化地域行動計画を策定し、国連・健康な高齢化の10年（2021-2030）に沿って、各国の活動を後押ししています。

高齢化プログラムでは、健康な高齢化は、未来の社会と保健医療システムを導く「道しるべ」だと考えています。保健医療、社会の仕組み、暮らしの環境づくりを一体として整えることが、現在だけでなく未来の高齢者を含むすべての人々の健康とウェルビーイングにつながります。気候変動や急速な都市化、デジタル化（AIを含む）といった大きな変化の

中で、支援が届きにくい人を取り残さない仕組みづくりも重要です。

私たちは、人口構造の変化がこれから本格化する国々に、高齢化の課題が深刻化する前の「先手の備え」を呼びかけています。例えば太平洋島しょ国のように、今は人口が比較的若く高齢化が最優先ではない国でも、人口構造は近い将来確実に変化します。高齢化が本格化してから慌てるのではなく、当事者と一緒に、政策づくりに加えて、コミュニティを基盤にした相談から支援につなぐ流れ（住民組織や地域の拠点を含む）や、担い手・財源の見通しなどを今から整えることが重要だと考えています。

具体的な業務は大きく四つの柱で進めています。第一に、政策・計画支援（行動計画、指標、モニタリング）。第二に、実装支援（地域包括ケアや高齢者にやさしいまちづくり等を、各国の既存制度に合わせて導入）。第三に、研究・評価（実

装研究を通じた知見の蓄積）で、例えば神奈川県とNCDと高齢化に備える政策の選択肢を探る研究プロジェクトが始まりました。第四に、学び合い（ピアラーニング）で、ASEAN等のプラットフォームも活用しながら加盟国間の実践知の共有を支えています。

このような取り組みは、保健セクターにとどまらず、社会セクターやコミュニティ、学術機関など多様なステークホルダーとの協働が不可欠です。公衆衛生の専門性を生かしながら、自分たちの将来を形づくる大きなアジェンダに関われることに、やりがいを感じています。

国連に入るまでの経験について

私自身の歩みは、臨床現場から始まりました。患者さん一人ひとりと向き合う1対1の看護ケアを通じて、ケアの大切さを学ぶ一方で、個別の努力だけでは限界があることも痛感しました。そこで、



写真1 WHO西太平洋地域事務所（マニラ）／第75回地域委員会にて高齢化チームメンバーと



写真2 東ティモールでの看護・助産人材育成に関する研修にて



写真3 ミャンマーでのHIVコミュニティ啓発イベントにて



写真4 ブルネイでの高齢者の統合的ケア (ICOPE) のトレーニングにて

日本看護協会では資格認定制度の推進に携わり、質の向上という「システム」を構築することで、より多くの患者さんの健康へ貢献できることを学びました。日本の看護継続教育制度を海外の関係者に説明した際、「なぜ国家試験合格後も学び続けるのか」と問われ、自分の「当たり前」が通じないことを実感しました。皆が納得できる指標で制度の価値を示す必要性を痛感すると同時に、世界は広く、知らないことだらけで面白いと感じました。こうした好奇心と問題意識から国際保健政策学を学ぶため大学院に進学し、エビデンスづくりと政策につなげる視点を身につけました。

国連に入ってから経験について

2016年からインドのニューデリーにあるWHO東南アジア地域事務所に入り、最初の2年間はヘルスシステムの分析や多国間比較、政策提言の支援に携わりました。その後の2年間は、看護・助産、また高齢化プログラムの担当者として各国の人材政策や教育・規制の整備を後押しし、現場の質を底上げする取り組みにも関わりました。例えば、助産ガイドラインや教育カリキュラム策定のプロセスを支援し、国の文脈に合った形で「使える」指針に落とし込む難しさと面白さを学びました。国ごとの制度や文化が異なる中で、同じ言葉でも受け止め方が違い、共通理解をつくるのが難しい場面もあ

ります。科学的根拠に基づく提案を示しつつ、相手の状況に合わせて「使える形」に翻訳し、合意をつくり、実装につなげる。そのプロセスにWHOの仕事の醍醐味があると感じています。

その後、UNAIDS（国連合同HIV/AIDSプログラム）ミャンマー国事務所での3年間は、HIV対策を支える戦略情報（モニタリング・評価）や調整業務に携わりました。限られた資源の中で、どこにどの介入（予防、テスト、治療）を優先すべきか、データと対話で見極めること、そして脆弱な立場に置かれやすい人々の視点を軸に据えることの重要性を学びました。コロナ禍と政情不安が重なる中でも、国連機関としての中立性を土台に関係者をつなぎ、多様なパートナーと連携して必要な支援を進めることができたと感じています。同時に、現場の実情に合わせて優先順位と実施方法を柔軟に調整しながら、支援サービスを途切れさせないことの難しさも経験しました。

将来WHOを目指す方へ

まずは「専門性」と同じくらい「協働する力」が大切だと実感しています。WHOの仕事は一人では進みません。異なる背景の人と対話し、相手の前提を理解しながら、共通言語をつくって合意を積み上げる力が求められます。また、インターン、フィールド経験、研究協働、コンサルタントなど、早い段階で国際的な現場に触れる機会をつくると視野が大

きく広がります。WHOには多様な声が必要であり、日本の経験や強み（UHC、災害対応、健康な高齢化など）は国際的にも貢献できる領域が多いと感じています。多くの方が興味を持って、仲間になってくださることを楽しみにしています。まずは一步、踏み出してみてください。

参考文献

1. World Health Organization, Regional Office for the Western Pacific. Regional Action Plan on Healthy Ageing in the Western Pacific. WHO; 2020. <https://www.who.int/publications/item/9789290619352>
2. World Health Organization. UN Decade of Healthy Ageing (2021–2030). <https://www.decadeofhealthyageing.org/>
3. World Health Organization, Regional Office for the Western Pacific. “Addressing megatrends of population ageing and NCDs: WHO launches new partnership with Japan’s Kanagawa Prefecture.” 30 September 2025. <https://www.who.int/westernpacific/news/item/30-09-2025-addressing-megatrends-of-population-ageing-and-ncds-who-launches-new-partnership-with-japan-s-kanagawa-prefecture>